

『化身土巻』に学ぶ（2）の補充

ここの第 19 願の成就文ですが、『大経』の「三輩の文」と『観経』の「九品の文」と言われています。これについては次の「三・三の問答」で触れられていきますが、このご自釈の次に、三輩・九品の引用ではなく、無量寿仏の「道場樹」の文を引用し、そして「胎生・化生」の内容が引用されてきます。

このことを、どう了解するか。少々所感を述べておきたいと思います。

第一に「なぜ道場樹という樹なのか、そしてそれがなぜ道場なのか」という事について考えますと、釈迦の成道が思い起こされます。即ち菩提樹の元で悟りを得るわけです。そしてその法悦に浸っているわけです。そこに梵天があらわれて、その悟りを衆生に広めてくれるように頼むわけですね。ご存じの「梵天勸請」ですね。その時、二回断るわけです。それで三回願うので、釈迦は引き受けて、最初一緒に出家してきた五人に法を説くわけですね。簡単に簡略して述べましたが、釈迦は何故断ったか。それは「この法は難解で誰にもわかるはずはない」と思ったわけですね。

この事は、この願成就文に重ねてみれば、「疑惑心」ではないかと思うんですね。この娑婆の衆生を信じない、この娑婆の衆生の仏性を信ぜず、但法悦の宮殿に留まっている姿ではなかったのか、という風に重ねてみる事ができるわけです。ここに「胎生」と「化生」という二つの姿が透き通って見えてくるわけです。この時の「化生」とは「転法輪」という事になってまいります。

思えば、「道場」という言葉は、私達現代の聞法会などにおける傲慢さや閉鎖性などを見抜いた「胎生・化生」ではないのか。

親鸞当時、同朋同志の中で、私達と同じようなことがあったのではないのでしょうか。だから「自ら己が能を思量せよ」と戒められているのではないのでしょうか。